

## 第5節 文部省道徳教育推進指導資料作成協力者会議

### －資料『峠』『スダチの苗木』に込めた願い－

私は1993年度、文部省道徳教育読み物資料作成協力者会議の委員の一人として文部省（現・文部科学省）での会議に参加した。その会議の中で私は、部落出身である自分の生い立ちや生きざまをさらけ出し、人権・部落問題学習の重要性を訴えていった。

そして、全国すべての中学校で道徳の時間に人権・部落問題学習が実施されることを願って、私の父親への思いを『スダチの苗木』という作品にまとめ、今なお血をふいている結婚差別の現実を『峠』という作品にまとめた。

この二つの作品が、文部省「中学校道徳読み物資料とその利用」（集団や社会とのかかわりに関する）に掲載されるまでの道のりは、私自身の教育観や生き方を検証していく営みであったが、これらの作品は未だ部落問題に関わる作品を文部省が、道徳教育の資料として取り上げたことがないという厳しい現実を乗り越えて、作品として日の眼を見ることができた。

人ととのつながりの中で、多くの仲間に支えられ、自己や他者、社会をみつめなおす機会になった文部省道徳教育読み物資料作成協力者会議での営みを今一度整理しておきたい。

1993年8月31日、中学校における道徳教育推進指導資料（指導の手引）4「主として集団や社会とのかかわりに関する」との資料づくりに取り組むようになり、文部省での会議に参加することになる。期間は1994年3月までとなっており、12回の会議が開かれるようになっていた。

会議は8月（31日）の組織づくりの会議。そして9月（13日、24日）に2回、10月（4日）に1回、11月（13日）に1回、12月（7日、27日）に2回、1月（24日）に1回、2月（2日、21日）に2回、3月（8日、24日）に2回と12回実施されていくのである。

私は8月31日の会議で4の視点「主として集団や社会とのかかわりに関する」との内容項目4の(3)「正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、社会連帯の精神をもって差別や偏見のないよりよい社会の実現に尽くすように努める」と内容項目4の(5)「父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くようにする」を担当するようになった。特に内容項目4の(3)には大いなるこだわりをもっていた。

内容項目4の(3)について中学校指導書「道徳編」（平成元年）には次のような記述がある。

【中学生になると、自己中心的な考え方や行動をとりがちである。この時期に、性・年齢・身分・能力等において、だれに対しても公正・公平に接し、差別や偏見を持たないように心掛ける社会連帯の精神が何よりも大切で、そのことに生徒自らが気づくように指導する必要がある。

社会連帯の精神は、一人よがりの正義に基づくものではない。自分本位であったり、自分が所属している集団にこだわり続けるようでは、社会に生きる人間として適正さを欠くことになる。

正義を重んずるということは、観念的な道理を把握することではなく、正しいことを自ら積極的に実践に移せるようでなければならない。「見て見ぬふりをする」とか、「避けて通る」という消極的な立場ではなく、不正を憎み、不正な言動を断固として否定するほどの、たくましい人間が育つてくるように指導することが大切である。この世の中から、身分的な差別や社会的な偏見をなくす

ように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会の実現に積極的に尽くすように努力するよう、指導することを忘れてはならない。】

最後の文章「この世の中から、身分的な差別や社会的な偏見をなくすように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会の実現に積極的に尽くすように努力する」へのこだわり、それは今まで文部省から出された道徳教育の指導資料、特に昭和42年にまとめられた「中学校道徳の指導資料」(文部省)3集、昭和51年から刊行されてきた「中学校道徳の指導資料とその利用」(文部省)6集の中にも、今回の平成3年から刊行されている「中学校読み物資料とその利用」(文部省)視点1～3の中にも、ただの一つも部落問題を取り上げた資料がないということである。

全国同和教育研究協議会結成40年を越え、全国同和教育研究大会では、西日本を中心に2万人を越える参会者で開催されている。しかし、未だに同和教育は日本全体の教育になっていない現実がある。私は今回の「中学校読み物資料とその利用」(文部省)視点4の中にどんなことがあっても部落問題の資料を入れることを熱望した。それが徳島の地から文部省へ10回余りも往復することの意味だと考えたからである。

9月14日の最初の原稿検討会で私は内容項目4の(3)の資料に、1992年度末にまとめた『よろこび』第2号の冒頭の文章である『スダチの苗木とキンカンの苗木』を作品の原案として提出した。その資料は以下の内容であった。

\*\*\*\*\*

### スダチの苗木とキンカンの苗木 (原案)

私が被差別部落（以下部落）の人間であることを初めて知ったのは、中学2年の時であった。それまでは部落問題の存在は知っていたが、まさかそれが自分のことであるとは夢にも思っていなかった。それは学習会の会場での友人との会話からである。

部落問題に積極的な考えを持っていたY夫が話し出す。

「健ちゃん、学校の先生にならんて、それがこの差別をなくす一番の近道と思うんよ。」

私はその言葉の真意を彼に聞いかけたとき、彼は、

「これ、わしやのことですよ。わしらは部落に生まれたことになつとんでよ。」

と返してきたのである。

私はこのときのやり取りで、初めて自分が部落の人間であることを自覚する。同じ立場の仲間から聞かされたことによって、大きなショックはなかったが、何か心の中に重たいものがのしかかってくる感じであった。そして、そのときにY夫が私に対して囁いた言葉が、後の私の大きな支えとなって残っている。彼の「学校の先生にならないか」という言葉に何か心がわくわくするような思いになっていった。

私は中学時代、部落の仲間と共に励まし合いながら、将来、教職につくという憧れをもって頑張ってきた。しかし、その憧れは高校時代、段々と小さなものになっていく。

高校時代に私は丸岡忠雄さんの『ふるさと』の詩と出会う。部落問題に関わって丸岡さんのような生き方をする人が存在することに「よろこび」を感じながらも、私はふるさとを離れることばかり

り考えるようになった。それは部落問題からの逃避以外のなものでもなかつた。

私の生まれた町には土方をする人がたくさんいた。それが部落差別に起因するものであることは頭ではわかっていた。しかし、私の父と母が土方仕事に従事することを表面では感謝しながらも、父の仕事に対する恥ずかしさがあった。高校時代、休日に父の運転する車で建設現場に何度もアルバイトに行った。そんな時、友だちと擦れ違う。父には申し訳ないと思いながらも、知らず知らずのうちに気づかれまいと顔を隠そうとする。心の中は顔から火が出るほど恥ずかしい気持ちになっている自分がそこにいた。

小学校の頃、学年の最初に提出する家庭環境調査の父の職業の欄を書く時、両親が相談していたことをはっきり覚えている。両親の心の中にも「土方」をしていることを小学校の先生に隠しておきたいという気持ちがあったのだろう。ある年は「運転手」と書いてくれた。建設会社のマイクロバスの運転をして他の人夫さんを運んでいたからだった。ある年は「農業」と書いてくれた。わずかばかり家族が食べるだけの米を作っていたからだった。どれもこれもすべて嘘であった。

当時、親が私に気を使ってくれていることは小さいなりに痛いほどわかつたが、子ども心に私は将来、はっきりと人に言うことのできる仕事につきたいと思うだけで、父の仕事に嫌悪感さえ持っていた。

そんな思いを引きずっとままで中学時代、高校時代を過ごしていく。中学時代同じ立場の仲間がいた中では、ある程度自分に自信を持って頑張ることができていたのだが、高校時代では全く馴染みがあった。高校時代、何の前触れもなく、突然に部落問題についてのロングホームがあった。クラスでただ一人、部落の人間であることを隠してその話し合いに参加するのはつらいものがあった。差別的な発言をするクラスメートはいなかつたが、無関心な生徒や部落の人たちを可哀相な存在としか捉えていない生徒が大半である状況に、私は苛立ちを感じながらも、ただ黙って耐えていくだけであった。

そんな中で私は、県外の大学に進学することをまず第一に考えていくようになる。私が県外で大学生活を送るということは、そんなふるさとや親から逃避することであり、それはその底にある部落問題から逃げていくことであった。

私は大学時代を京都で過ごした。祖父に連れられて高校3年の春に見た京都は、とても美しく心を清らかにしてくれた。祖父と共に歩いた京都御所の小雨に濡れた砂利道。そして、歴史の重みを感じさせるその町並みは、京都での大学生活への大きなあこがれとなっていました。そんな高校時代のあこがれが現実のものとなり、京都で大学時代を過ごすようになる。

しかし、そんなあこがれの気持ちを打ち砕いていくかのように、私は京都の地において部落差別に出会い、何度も苦しい思いをしていく。部落問題から逃げようとしたが京都において、部落差別の現実を目撃していくのである。

京都での部落差別の現実の中で、最もショックだったのは、私を大切にしてくれ、とても信頼していたアルバイト先のおばさんに四本指を突きつけられた時だった。

それは私に対してではなかつたが、ふるさとを離れて暮らす私には、無理をしてでも私を大学まで行かせてくれた父や母、祖父や祖母の生きてきた道のりの中にもこんな差別がいっぱいあったの

かと思われ、その夜、遠くふるさとで私を支えてくれる家族のことが思われて、無性に悲しく、体の力が抜けるようになった口惜しさを噛みしめていた。私はその日のことを忘れる事はない。

もう一つ、母のように洗濯をしてくれ、田舎に帰るときは、必ず京都の土産を持たせてくれ、心の底からこんなすばらしい人はいないと信頼していた下宿のおばさんの言葉も、忘れられないものとなっている。

おばさんは、下宿の近くにある同和地区を指して言わされた。

「森口さん、あの地域の人たちは、生まれがちがいますから。かかわらないで…」

私はこの言葉の奥にあるものを敏感に感じた。部落差別はあらゆる人の中に偏見となって、巧妙に脈々と生き続けていることを深く認識した瞬間でもあった。

信頼する人から出る差別は本当につらいものがある。そのような状況の中で私は部落出身であることをひたすらに隠し続けた。特に心から信頼し、感謝し続けた下宿のおばさんに対して、お世話になった大学2年の4月から大学4年の3月卒業までの3年間、本当のことを隠し続けて京都を去ったことが、今も悲しい思い出となっている。

「おばさん、私はおばさんが言われる生まれがちがうという人たちと同じ立場の人間なんです。私の父親は、私の母親は、厳しい差別の中をひたむきに働き、私たち4人の兄弟を精一杯に育ててくれました。私は私の両親や、祖父や祖母を苦しめてきた部落差別をどんなことがあってもなくしていきたいと思っているんです。」

そんなことが言えたらどんなに自分は救われるだろうかと何度も思った。京都で出会った部落問題の現実、その現実にふれるたび、ふるさとへの思いは募ってくる。ふるさとへ帰ろう。このような思いを味わっていくであろう部落の後輩たちに応えていく同和教育を実践していく教師になりたいと思った。私に再び、教師になることを決断させたのは京都での大学時代、京都での暮らしであった。

京都の下宿を引き払う時に、父が荷物を運ぶために親戚から1トントラックを借りて私の下宿へきた。父が京都の下宿を訪れたのはこれが初めてだった。私には1人の弟と2人の妹がいたが、私を頭に4人の子どもを育てるために、休むことなく働き続けた父の姿をこの時しみじみと思った。私は父が毎日の生活の中でお金を持っているのを見たことがない。

父は財布を持たない人であった。給料はすべて母に渡し、自分が自由にお金を使うことはほとんどなかった。夕食の時、わずかな晩酌をすることぐらいしか楽しみを持たない父の姿、ただひたむきに働き続けた父の姿、心の底から感謝できるが、当時の私にはそんな父の姿がとても憐れにも写っていた。同じ下宿にいた大学の後輩たちの両親が京都へたびたびきていたが、その姿は私の父の姿とは全く異なっていた。

私には初めて下宿を訪れた父の姿が、とてもみすばらしく写る。最後の最後ぐらいこじやんとした格好できてくれたとさえ思った。

そのとき、父はスダチの苗木とキンカンの苗木をトラックの荷台につんでいた。どうしてそんな苗木を積んできたのかと聞くと父親は言う。

「お前が世話になったお礼に、おばさんのお宅に植えさせてもらおうと思うて…。」

私はそのとき何も言葉を返さなかったが、心の中ではこの父の行為を軽蔑していた。すごく恥ずかしい気持ちになって、もっと気のきいた礼の仕方があるだろうにと思っていた。そして、裕福でないために、こんな形でしか礼をすることができない父の姿を憐れにさえ思い、このことはだれにも言うまいと心に誓って自分がそこにあった。

しかし、私の心の中には苦労しながら、自分のあらゆるものを子育てにぶつけてくれた両親に応えたいという感謝の気持ちは人一倍ある。その思いが私に教師という道を選ばせたのである。

部落解放という志をもった私であったが、父へのこだわりや部落へのこだわりをもつ私に、確かに同和教育はなかなかできるものではなかった。常に思いが空回りしていき、どこかで自分を押さえ、自分が傷つくことを恐れているのである。

その頃の私は、私を部落の人間と知っている人たちとの話し合い、語らいには熱っぽくなるが、私のことを部落出身と知らない人との会話では、常に一步引いた弱さがあった。私は部落の人間でありながら、心の奥底では、部落を恥ずかしがり部落を差別していたのである。

そんな私は、自分自身の教師になろうとした原点を求めて、幾度となく京都を訪れる。特に結婚した折、子どもが生まれた折、そんな人生の節目節目に必ず京都の下宿を訪れた。下宿をたずねる度におばさんが話してくれる。それは父が植えていったスダチとキンカンの苗木のことである。

「ご家族の皆さんお元気ですか。お父さんの持ってきてくださった苗木は立派に育っています。まだスダチの花は咲きませんけど、キンカンは立派に花を咲かせます。あの木を見る度に森口さんたちがおいでた頃を思い出すんです。」

下宿をやめられて数年が経過し、もう80歳を越えたおばさんであるが、いつもしみじみと語られる。その度に私の父に対するこだわりが、洗われていく思いであった。私はおばさんの温かい思いや自分自身の本当の生き方をぶつけた同和教育の実践の中から、かつて恥ずかしいこととしか思わなかつたことが、自分自身の生きる誇りと変わっていくのである。

私は、私の同和教育の実践記録『よろこび』－わが人生の礎として－にまとめている。その冒頭に『スダチの苗木とキンカンの苗木』と題した私自身の目覚めというべき文章と掲載した。

私はその実践記録を父親に一番に読んでもらうことを願い、その冊子を父親に手渡す。父親は、おまえも頑張っているんだなあという表情でよろこんで受け取ってくれた。

その3週間後だった。私は父親に、「父ちゃん、この前の本読んでくれた？」と問いかけると、父親は顔を真っ赤にした。しばらく二人の中に沈黙が続くが、私は自分自身に問いかけるように父に言った。

「父ちゃん、土方仕事をして、一生懸命に働いて、必死に4人の子を育ててきたことが誇りになる。そんな社会になっていかなあかんと思う…。」

「わしはそんなことを同和教育の取り組みの中から思うようになってきた。人間の誇りというものはどうだけひたむきに生きたかだと思う…。」

「一生懸命働きよる父ちゃんの本当の思いに気づき、父ちゃんの頑張りに誇りをもって生きていいくことが、ほんまの人間の生き方やと思う…。」

「わしの中学時代と同じ思いの中で揺れている中学生に、しっかりと生きることの意味を伝えてい

きたい。そして、人間として生きる誇りを共につかんでいきたいと思うとんや…。」

父は真剣に私を見つめていた。かつて私が見たことのないような鋭いまなざしで私を見つめている。しかし、その眼に私は熱いものを感じる。それからもしばらく沈黙があつたが、父は絞り出すように語ってくれた。

「お前のような先生がおつたら、部落の子は、ほんまにうれしいだろうな。」

この言葉に私は胸の奥からこみあげてくる熱いものを感じていく。私はこの父たちの思いに応えていく同和教育の実践をどんなことがあって頑張り抜く。

それが本当の教育だと信じているから…。

\*\*\*\*\*

私の思いのすべてを綴ったこの文章を読み上げたとき、委員の先生方はかなり驚かれたと思う。どうしてこんな人間が、この会議の中にいるのかというような思いになられた先生もおいでただろう。私はその会議でひたむきに私の思いを語っていった。その当時のことを私は、次のように記している。

【8月31日、私はそのことの重大さを感じつつ1回目の会議に参加する。自己紹介のとき、私は私なりの道徳教育に寄せる思いを語る。どうしてこの会議に参加しているのか、ここに呼ばれてきたのか、不安はいっぱいであったがやりがいを感じた会議となった。

9月13日、2回目の会議、各自が担当した内容項目の作品を持ち寄る。私が担当している内容項目4の(3)に私は私のすべてをぶつけた作品『スダチの苗木とキンカンの苗木』を用意した。今までの資料の中に全くない作品であり、否定されることはわかっていたが、私自身の生き方を丸ごとぶつけた作品として、その思いを他の先生方に伝えたかった。国民的課題と言われながら、全国的に考えてまだまだ同和教育がそこまで行われていない現実。運動団体の対立、そのことによって生じる様々な問題、私の力など全く及ばない現実をひしひしと感じていく。当然ではあるが、会議での他の先生方の発言も消極的な発言がほとんどであった。

予想していた通り、私の作品を受け入れようとする意見は極めて小さいものだった。同和対策審議会答申の中に記されている国民的課題ということ、その解決は国の責務であるということ。徳島県教育委員会が常に訴えている教師の同和教育観の確立、そんな言葉が虚しく思えてくる。部落差別解消の道、その教育が直面している厳しい現実がここにある。

私には部落差別を始めとする差別の悲しみを捉えることができないで、人間としての生き方を求めていく道徳教育は、決して成立しないという確信がある。しかし、私の訴えはなかなか伝わっていかないだろう。だからこそもっともっと力をつけなければならない。私は同和教育の実践の中でつながっている仲間のことを思いながら、自分自身を励まし自分を奮い立たせていこうと思う。

その会議が終わった後、以前からつながりのある先生に私の思いをぶつけた。その先生は静かに語ってくれた。

「同和教育はまだまだタブーでしかない。でも『スダチの苗木とキンカンの苗木』という作品は、胸を打つものがあるから、是非別の視点でまとめてみたらどうだろうか。」

今自分がやろうとしていることは何であるのか。現実は厳しい。しかし、その峠が厳しければ厳

しいほど頑張る力は大きくなる。今まさに自分自身の生き方が問われていると思う。

あらゆる人に同和教育の重要性と「よろこび」を実感させていくような作品、自らの差別意識に気づき、その差別意識を洗おうとする作品、委員の先生方に「是非ともこの作品を道徳の指導資料の中に入れませんか」と言ってもらえるような作品を私は書きたいと心から思う。もっともっと力がほしい。道は険しいだからこそ全力で頑張っていこう。】

私は部落問題が取り上げられることのない現実、私はそれ以後私なりに精一杯の歩みを続けた。その一つとして『スダチの苗木とキンカンの苗木』を4の(5)の内容項目に書き換えた。このことによってこの作品は全国すべての地域で容易に活用される作品となる。それは一步後退のようにも思えるが、実は大きな前進であったと確信している。当時の記録に次のようなものがある。

【9月24日、第3回目の会議、一見妥協のようにも感じられたが、自分なりに新たな一步を進んでいくことになる。私はこの会議で大きなものをつかんでいるようにも思える。

道徳の指導資料について私の心の中にあるのは、本物をぶつけなければ、生徒の本物の声は聞こえてこないということだ。教師の本当の思いが語られ、生徒一人一人の本当の思いが重ねられていくからこそ、一つ一つの授業がすばらしいものになっていく。私が道徳の時間において最も大切にしたいことはそのことである。その意味において、私が内容項目4の(3)として提起した『スダチの苗木とキンカンの苗木』は真実の作品として全国の中学生に訴えたい作品である。この作品はまさしく真実である。この作品を普遍的なものとして全国の中学生の心に届けていきたい。そこから部落問題の学習につなげていければと思う。】

『スダチの苗木とキンカンの苗木』は、多くの人と議論を重ねる中で、部落問題という記述を除き、違った角度で作品としてまとめることになった。この作品は『スダチの苗木』としてまとめられていくが、この作品によって私自身のものの見方は幅広いものになったことを様々な意見をいたいた委員の先生方に感謝している。

しかし、会議がスタートした最初の3カ月ぐらいは、本当にいらだったし焦りました。そして、私の心の底には、いつしか部落問題そのものが資料として取り上げられることはないとあきらめと、そこからくる苦悩があった。そんな私の思いを委員の先生方は、段々と理解を示してくれたことが大きなよろこびである。

大阪教育大学の藤永先生の言葉。

「道徳教育は差別という面においてとても弱い、もっとその面にせまる作品を作らなければならぬと思うんです。その意味において先生の作品『スダチの苗木とキンカンの苗木』には物凄いインパクトがあった。先生の訴えは決して無駄にはなっていかないと思いますよ。私もできる限り応援しますから、差別問題を取り上げた作品、頑張って書いてみてください。」

児童文学の大野先生の言葉。

「先生の作品にはとても胸を打たれるものがあります。被差別の側からの作品は極めて少ない。先生頑張って書きませんか。先生には多くの人を感動させる熱いものが流れていますよ。」

そんな思いに支えられて私は『峠』という作品をまとめていった。しかし、その作品を提出することになっていた12月7日の第6回目の会議を当時の私のクラス3年A組が、文化祭のときに取り

組んだ人権劇『水平社バンザイ』を板野町解放文化展の生徒発表として演じることになったため欠席する。限られた会議、しかも正念場となる会議を欠席すること、それはとても苦しいものがあった。しかし、生徒と共に全力で人権劇に取り組んだことで、私は人権について考える道徳学習とは、どのようなことが求められるのか、その中で今自分にできることはどういうことなのかをじっくりと考えることができたと思っている。

その苦悩の中で生まれた『峠』という作品（原案）は以下の通りである。

\*\*\*\*\*

## 峠 (原案)

小野幸司と阿部恵子が出会ったのは大学時代であった。二人は地方にある大学の教育学部の同じ研究室で学んでおり、互いにひかれるものがあった。

卒業を半年後に控えた秋の日、研究室でレポートをまとめていた恵子に同級生の智子が囁いた。

「恵子さん、小野君とつきあっているみたいだけど、知っているの。」

「何のこと。」

「小野君って、あっちの人よ。」

「あっちって何。」

「ほら、部落（被差別部落）のことよ。」

「…。」

恵子のペンの動きがピタッと止まった。

「つきあうの、やめた方がいいと思うよ。」

「そういう考え方って、おかしいと思う…。」

恵子はやっとの思いで答えたが、智子との間に気まずい空気が流れた。恵子が部落差別を目の前にしたのは、このときが初めてだった。恵子は、小学校時代から部落問題について学んでいたし、その不合理についても認識しているつもりだった。

江戸時代に幕府は、安泰を図るために土農工商という身分制度をつくって農民に重税を課し、その不満をそらすためにその枠の中にさえ入れてもらえない低い身分をおいたこと。

明治になって四民平等になり解放令がでた後も、何の対策もなされなかつたためにこの身分に組み込まれた人たち（同和地区の人たち）は、その劣悪な生活実態から抜けきれず、今日法律によつて生活実態の改善が図られてはいるものの、なお心理的な差別が根強く残っていること。

そして、それは早急に解消しなければならない重大な社会問題であることを知識としてはわかつていた。しかし、そのときの恵子にはそれ以上の言葉を返すことはできなかった。

部落差別が恵子自身に重くのしかかってきたのは、教職について3年が経過した秋であった。両親の知人から、何度も見合いの話を持ち込まれていたが、恵子は幸司への思いからそのすべてを断わり続けていた。しかし、恵子の心の片隅には、大学時代の秋の日の智子との会話が刻まれており、幸司が部落出身というこだわりをなかなか乗り越えることができないでいた。それゆえに恵子は、両親に幸司との交際をなかなか切り出すことができなかった。

「恵子、もう結婚を考えていいい年頃よ。だれかいい人がいるの。」

「おかあさん、実は私、結婚を考えている人がいるの。」

思い切って幸司との交際を母に打ち明けた翌日、母は深刻な表情で恵子に詰め寄ってきた。

「あなたがお付き合いしている小野幸司という人、同和地区の人だということ知っているの。」

「そんなこと関係ないと思う。私にとって小野君は尊敬できるすばらしい人なの。」

「そういうわけにはいかないの。いくらあなたがその結婚を望んでも、このことだけは認めるわけにはいかない。」

恵子の父は銀行員であり、母は自治会の世話役をしていた。特に母は部落問題解決に向けての啓発活動にも積極的に参加しており、恵子は母の生き方をいつもまぶしく見つめていた。それだけに母の言葉は大きなショックであった。恵子は母に食い下がるように訴えた。

「お母さん、お母さんは自治会の活動なんかで、いつも差別問題をなくさなければと訴えてきたんじゃないの。どうして私のことは認めてくれないの。」

「人のこと、遠くのことに対する人は間違った見方をするのが常識だ。でも現実はそんなにあまくはないの。あなたの結婚を認めたら、たちまち妹の愛子の結婚に大きな障害となっていく。たぶん見合いの話なんかは全くなくなると思う。それが世の中の現実なの。みんなは自分に関わりのないところでは差別をなくそうということは言えるの。でもその中にはなかなか飛び込めないものなの」

「それはおかしいと思う。お母さんはわかってくれると、思っていたのに…。」

「まだ恵子にはわからないかもしれないけど、世の中はそんなに簡単にはいかないの。これ以上お母さんたちを苦しめないで…。」

口数の少ない父も、このときは違っていた。

「お前のつらい気持ちはわかる。でもなあ、お母さんが言うように、お前にも、私たち両親にも、愛子の幸せを奪う権利はない。それだけではない。お前のいとこたちも、これから結婚に関わって肩身の狭い思いをしていくんだ。それが部落差別なんだ。」

恵子は返す言葉を失い黙り込んでしまった。その場にいた祖母も何とも言えない悲しそうな表情をしていた。その夜、恵子と家族の間に大きな溝ができてしまった。恵子にとって何よりつらかったことは、祖母がショックで寝込んでしまったことだった。

恵子は苦しみ続けた。信頼できる友人に相談もしたが、家族の強い反対を押し切ることへのためらいを消し去ってしまうことはできなかった。そんな中で一番の支えになったのは、県外の大学で学んでいた妹の励ましであった。

「お姉ちゃん、絶対に負けないで。私もお姉ちゃんのように世間に惑わされない生き方をしたいと思っている。お姉ちゃんが本当の幸せをつかもうとしているように、私も頑張っていくから…。」

真実をしっかり見つめながら、力いっぱい応援してくれる妹の言葉が、たまらなくうれしかった。また、同じ職場の先輩の励ましもあった。

「両親にわかってもらえるまで話し合いを続けることよ。あなたの両親だもの必ずわかってくれる。それと、小野君としっかり語り合っていくことが大切よ。」

恵子の重苦しい気持ちは少しずつ楽になっていった。もう一つ気になることは、それまで幸司と何度か部落問題について語り合ったことがあるのに、幸司自身から部落出身であるということを聞かされていなかつたことだった。恵子は幸司との絆を確かめるためにも、幸司自身の口から部落出身であることを聞きたかった。

数日後、恵子は幸司に対して恵子自身の苦しみを初めて語ろうとした。しかし、恵子の心の中ではいろんな思いが交錯して適當な言葉がでてこない。恵子は思い切って幸司に言った。

「幸司は、私を信頼していない。どうして…。」

「どうした、恵子。」

「幸司はどうして本当の気持ちを言ってくれないの…。」

恵子の精一杯の言葉だった。恵子の目には涙が溢れた。かつて見せたことのない苦しそうな表情に幸司は困惑した。しかし、その涙の意味がはっきりとわかるのに時間はかからなかった。

幸司の中には怖れとこだわりがあった。それは部落というものがこんなに重いものかという怖れと、どうして自分から部落出身であることを語らなければならないのかというこだわりであった。恵子のすぐるようなまなざしが幸司にはつらかった。しばらく沈黙が続いた後、幸司は静かに語り出した。

「恵子、部落のことだろう…。高校の頃、ふるさとを離れることばかり考えたこともあった。その頃は、僕にとって部落は重かった。でも今は違う。教師として、この問題と向き合って生きていきたいと思っている。今はその思いでいっぱいだ。」

恵子は幸司の言葉にうなずいた。

幸司は大切にしている一冊の手帳を差し出し、その最後のページを見せた。そこには『よろこび』という詩が書かれている。

部落で生まれ、部落で育ち、部落でくらし  
運動と教育にいのちをかけて六十年

或るときは、烈火の叫びとなり  
或るときは、草にすだく虫の声となり  
或るときは、鋭く差別の事実に迫り  
或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた

このみちは、きびしい莉の道なれど  
この道はわが生涯のつとめなり  
ゆくさきは、幾多迫害ありとても  
この営みは、わが終生の、運命なり  
しかし、この営みは、わが生命の生きがいにして  
わが生命のよろこびなり

「おれの宝物だ、わかるか。おれはこのために教師をしていく。」

恵子は食い入るように詩を読み、幸司の言葉にうなずいた。

「私の両親は、私たちの結婚に反対しているの。でも幸司とだったら説得できると思う。」

幸司は言った。

「乗り越えなければいけない峠がいっぱいあって、本当に苦しい思いをさせるかもしれないけど、いつしょに歩いてほしい。」

恵子の心の霧は晴れていき、二人の絆はより固いものとなっていった。この日から結婚差別という大きな峠を越える二人の闘いは本格的に始まった。

「あなたのことは娘から聞いています。あなたはきっといい人でしょう。でも、世間にはまだ部落差別があります。差別がある以上は娘の結婚を認めるわけにはいかないんです。」

初めて幸司が恵子の家にあいさつに行ったとき、母親から返ってきた言葉である。父親も言った。「あなたがいい人だということはわかっています。しかし世間に差別がある以上、あなたと結婚したら必ず娘は苦労します。親として娘を苦労の淵に落とし込むことはできないんです。」

また母親はこうも言った。

「こんな反対がある中で結婚しても、幸せになれるはずがありません。結婚は二人だけの問題ではないんです。お互いが苦労していくようになるんです。」

幸司はこみ上げてくる怒りや悲しみを必死に押さえていたが、やがて静かに語り出した。

「お母さんは世間には差別があると言われましたけど、世間という一つの生き物がいて私たち部落の人間を差別しているのでしょうか。世間というのは私たち一人一人だと思うんです。お母さんは世間という実体のないものを隠れ蓑にして、私たち部落の人間を差別しているんだと思います。私の父も母も、そして祖父も祖母も、厳しい部落差別の中を生き抜き私を育ててくれました。」

私はそんな親や、私を支え励ましてくれた人たちの思いに応える生き方がしたいと思っています。同じ道を歩む仲間として、私は私のこれから的人生、恵子さんと共にすべての子どもたちの幸せのために、また部落差別を始めとする一切の差別をなくしていくために歩んでいきたいと思っています。」

幸司の精一杯の言葉であった。母親は口調を強めた。

「あなたがいくら頑張っても、この差別は簡単になくなるものではありませんよ。どう言われても親として不幸の中に飛び込んでいく娘を放っておくことはできません。これ以上娘をあなたの思いに引っ張りこんでまどわさないでください。お願ひします。」

幸司は必死に耐えていた。しかし、どうしても耐えがたいものがあった。それは幸司の父の職業について聞かれたときであった。幸司には父の職業を否定するような問いかけに聞こえ、押さえていたものが切れていくようになる。

「あなたののような人を育てたご両親は立派な方でしょう。お父さんはどんな仕事をされていますか。」

幸司は必死に平静を装いながら語っていく。

「私の父は安定した職業にはつけていません。それは部落差別があったからだと思います。でも父はひたむきに働き私を育ててくれました。その父を私は誇りに思っています。私は私のことを

とやかく言われるのはいくらでも辛抱します。でも、私の父や母のことをとやかく言うことはどんなことがあっても許すことはできません…。」

幸司は涙を必死にこらえた。この人たちはどう話してもわかってくれないのかと思った。怒りを思い切りぶつけて、早々にこの場を立ち去りたい思いだった。幸司は恵子を見た。恵子は激しい表情で幸司を見つめていた。恵子の思いに応えるために今頑張らなければと思うが、もうその力はなかった。

真冬の凍りつくような夜、家までの道をどう帰ったのか幸司は、はっきりとは覚えていない。涙に曇ってぼやけた道を「オーオー」と叫び声を上げながら、車を走らせたことだけが記憶にある。

それでも二人は両親を信じて話し合いを続けた。そんなある一日、玄関先で見送ってくれたおばあちゃんが優しく語りかけてくれた。

「小野さん、市の広報の記事を読んで勉強しています。頑張ってくださいよ。」

幸司は、市の広報の記事ということが、同和啓発のページであることを直感した。うれしかった。帰り道、涙がこみあげてくる。救われる思いであった。

母がいくら感情的になっても恵子は冷静であった。幸司も両親から訪問をこばまれるときもあったが、恵子との愛を貫くために、繰り返し恵子の家に足を運んだ。幸司は人間の生命まで奪ってしまう部落差別への怒りを込めて、かつて、部落という“かけ”におびえた自分自身を語り続けた。そんな中で幸司は、恵子と共に確かな生き方をつかんでいった。当初かたくなであった両親も、段々とその本心を語ってくれるようになった。両親の悩みや苦しみは幸司たちにも理解できた。

人間は世間体というものにこだわり、知らず知らずのうちにお互いを傷つけてしまう、そんな弱さを持って生きている。そういう世間に流される生き方ではなく、その間違いをしっかりと正していく生き方がしたい。両親との話し合いの中で二人がつかんだ思いであった。

「あれほど熱心にやってくるあのエネルギーって何でしょうね。」

「あの青年は恵子と共に自分自身を語ることで、人間として確かな生き方を求めているように思う。」

「人間、あんな生き方ができたら本当に幸せでしょうね。」

幸司が帰った後で語られた両親の会話であった。

月日の流れの中で次のような会話も交わされるようになった。

「結婚に反対することを恵子の幸せのためと言ってきたけど、結局は私たちの世間体しか考えていなかつたことに気づいたの。お父さんはどう思う。」

「私も最近、自分のことばかり考えて、恵子の人格を認めていなかつたと思うようになった。」

「この頃やっと、恵子たちが言い続けている世間の意味がわかつてきたように思うの。それと、恵子が成長していく姿が、とても頼もしく見えるわ。」

「自分が世間体を乗り越えていくことが、恵子を幸せにしていくことにつながると思う。」

時間はかかりはしたが、両親の意識は確実に変わっていた。

季節が夏から秋に移る頃、恵子が両親に言った。

「結婚は、みんなに祝福されてしまい…。お父さんやお母さんにも、幸司さんのご両親にも、心の

底から喜んでもらえる結婚にしたいの。」

「そうね。自分の子どもの幸せを考えるなら、他人の子どもの幸せを考えるのが、人としての務めだと思うようになったわ。」

「人を差別することは、自分の心を縛っていく。差別は損の分け取りだね。」

両親が続けて言った。恵子はたまらなくうれしかった。大きな峠を越えたと思った。

「部落の人たちはかわいそうな人たちだと思っていました。でもあなたは人間としての誇りを持って生きています。そんなあなたを娘も尊敬しています。」

翌日訪れた幸司に母親は語った。続いて父親も膝を一步つめて力を込めて語った。

「私も、部落の人たちは、重い荷物を背負っているかわいそうな人たちだと思っていました。しかし、その荷物の中に私たちが入っていたことにやっと気づきました。君たち二人の本当に愛し合う姿を見て、私たちも共にその荷物をかついで生きていこうと話し合ったんです。」

二人で燃やし続けてきた小さな灯が大きな炎となって燃え広がっていく。

二人は結婚式の招待状に次の言葉を記した。

『 生きるということ

愛するということ

相手のいのちを尊ぶこと

私たち二人は

現在も そして永遠に

すべての人間を尊敬し

すべての人間を信頼し

真実を正視し

美しさを求めて

生きていこうと誓いました

私たち 結婚します 』

\*\*\*\*\*

この作品は協力者会議で検討されることなく、12月27日の第7回目の会議の資料絞り込みの投票にかけられるようになる。私は私自身のこの資料にかける思いを添えて、すべての委員の先生方にこの作品を郵送する。そのときに添えた手紙は次のようなものであった。

【寒冷の候、先生には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

12月7日の会議に持っていく予定をしておりました。資料『峠』を送らせていただきます。

4の(3)の資料として、どうしてもこだわりたいものがあり、昨年の3月に結婚差別を乗り越え結婚した教え子からの結婚披露宴への招待状をベースに資料としてまとめてみました。

部落問題は国民的課題であり、その解決は国の責務であると、同和対策審議会答申に刻まれていますが、対象地区が西日本に集中しているために、同和教育の取り組みには全国的に格差があります。しかし、現実問題として、東北地方出身の人が、転勤してきた徳島の地、徳島の職場で部落差

別に出会い悩み、徳島県同和教育協議会のドアをノックするという現実（部落差別を許している職場には、東北地方の人を始めとする他の地方からの少数者をよそ者として排除していく現実）があります。

また、部落差別の存在を全く知らなかつた関東地方出身の女性が、その苗字から部落出身でないかと疑われ、本人の知らないところで興信所による調査を受けるという現実（部落差別があることによって、結婚した同和地区ではない男女の中に、お互いへの信頼関係をなくさせ、結婚後の生活に大きなしこりを残している現実）があります。

この二例とも、つい最近私の身近にあった出来事です。そんな差別の現実をふまえ、しっかりととした人権意識や人権感覚を持った生徒を育成する取り組みは、道徳の時間において絶対に必要なものだと考えます。

私は人間関係の中で最も必要なことが「差別や偏見をなくし、互いの存在を尊敬し合っていくことだ」と考えます。そのことは私の学級づくりの根本になっています。そして、その営みは、部落差別を始めとする一切の差別をなくす取り組みとなっていました。

私は本資料の主人公・小野幸司（仮名）や阿部恵子（仮名）の生き方、生きざまに生徒一人一人の生き方を重ねさせ、将来、差別解消の担い手となる生き方を生徒一人一人につかませたいと思っています。このような営みはすべての都道府県で、すべての中学校で実践されるべきだと考えます。

結婚差別の問題は部落差別だけではありません。様々な差別において結婚の問題は厳しい現実があります。生徒一人一人の差別意識を洗い、一切の差別を許さない生き方と人間として生きる誇りを持って、心豊かにたくましく生きる生徒を育てていくためにも、差別問題を自分の生活、自分の生き方に引き寄せて考えていくことは必要です。特に私は、様々な重荷を背負いながらも、ひたむきに生きる中学生にエールを送り続けたいと思っています。

中学生は、言い聞かせやお説教では絶対に変容しないということを日々の教育実践の中で実感します。生徒一人一人は、教師の誠実な生きざま、ひたむきな働きかけによって、本当の自分というものに目覚めています。このことは、本当の思いを語り合う仲間づくり、学級集団づくりを基盤に据えた道徳の授業実践の中から、私自身が実感し続けていることです。

『峠』と題した本資料、これは私の生き方そのものを象徴するような資料です。先生方のご意見をいただきながら、私なりに納得のいくものにしていきたいと思っています。

ご指導の程よろしくお願ひいたします。】

この手紙と資料に寄せて放送作家の大野先生から手紙をいただく。

【師走も半ばになりました。ご多忙の毎日と思います。今日『峠』の原稿とお手紙を拝読致しました。読み終わってしばらく強烈な訴えかけに圧倒される想いでいた。委員会の資料ということで、批評がましいことは避けたいと思います。読み物資料は一つのプロジェクトとして公開の討議の形をとっているからです。

これまで先生方の作品には、表面をなでるだけで、子どもたちに何を訴えたいか、血を流して書いているのか、ちょっと絶望的な感じであったので、貴兄の作品には心を打たれました。私は教壇に立って子どもたちに話しかける機会はないので、なおさら実践を通して子どもたちに訴え続け

ておられる努力に頭が下がります。

委員会の席で、構成や文章表現について意見を述べたり致しますが、実はそうした技巧は二の次で何より大切なのは、子どもたちに訴えたいメッセージが込められているかということなのです。資料としてではなく、作品としてまとめられるのを期待致しております。次に会う機会を楽しみにしております。】

また、横山調査官からも葉書がくる。

【前略、力作『峠』を拝読しました。かなりよく書けていると思います。身の引き締まる思いで、真剣に検討してみました。私の意見を述べておきたいと思います。

道徳の資料として見た場合に、登場人物のすべてについて内面の苦悩が描けていないと思います。(例・恵子、恵子の両親など)「ことば」として表に出た部分は書けていますが…。

もう1点、部落差別について全く知らない中学生が、この資料を読んだときにも、本質的なことがわかるようにする工夫が必要です。

この2点で今一度練り直す必要があると考えます。「人間として」差別を許さないという根本の人権感覚、人間愛、人間としての誇りに根ざした資料とするために特に第1点からの見直しをして、金字塔を建ててください。】

私はこの調査官からの葉書を受け取ったとき、調査官は真剣に部落差別に関わる『峠』と題した資料を採用しようとしていると思った。本当に頑張ろうと思った。12月27日までのすべての時間、いつも頭の中には『峠』の作品の一つ一つが渦巻いていた。多くの先生方の支えがあった。多くの人の支えや励ましの中で生かされている自分を実感する。

12月27日の第7回目の会議には格別の思いで参加した。横山調査官の配慮によって、わずかな時間であったが、『峠』についての検討の時間をとっていただいた。いろんな意見が出された。私の生き方そのものに対する熱烈な励ましの言葉があった。今一度資料の中身をしっかりと点検することになったが、それは私自身のこれから生き方に対する励ましとなって響いていく。

また、部落問題の資料を扱うのは本当に難しい。読み物資料の中に入れることは無理ではないかという意見もあった。私は静かに語った。

「道徳の指導書の内容項目4の(3)に記されている一節。『この世の中から、身分的な差別や社会的な偏見をなくすように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会の実現に積極的に尽くすように努力する』はまさしく部落差別の解消を訴えていると考えます。すべての教師が自らの問題としてこの学習に取り組まなければ、この学習は本物にはなっていかないのも事実です。また大半の教師がこの問題を自分自身の問題として捉えきれていないということも事実です。だからこそ、このような資料を文部省が取り上げていく。全国すべての中学校すべての中学校教師が、自らの生き方にこの問題を重ねて学習していくスタートにしていきたいと思います。私は部落差別をなくすということは、他の様々な差別をなくしていくことにつながっていくと考えます。部落差別をなくすということは、障害者差別や民族差別、男女差別、様々な地域での差別などをなくしていくテコになっていくと考えます。どうかまだまだ差別が残されている現実を見据えてほしいと思います。」

感情的にならずに言葉が出てくる自分。9月の頃とは違う会議の雰囲気を実感する。

会議の後半に一つ一つの作品についての評価が、資料の執筆に直接かかわった13人の委員の先生方による投票で行われるが、その中で内容項目4の(3)の『峠』も、内容項目4の(5)の『スダチの苗木』も、私の予想を越える評価をいただいた。しかし、『峠』の資料について言えば、それからが正念場であったと言える。

12月27日の会議が終わったと、放送作家の大野先生からいろいろな話を聞いていただく。先生の話の一つ一つが新鮮であり、大きな励ましとなって響いていく。

「かつてプロレタリア文学が、衰退していった過ちを繰り返してはいけないと思うんです。プロレタリア文学は、関心のある人には強い感動を与えていました。しかし、関心のない人には、そんなことがあるのかという程度でその心を揺さぶってはいかなかつた。

作品として部落問題を取り上げる場合の一番の課題は、関心のない人にどのような感動を与え、自分自身の生き方と重ねて考えようとする問題意識を育てていくことだと思うんです。

先生の描かれた『峠』という作品の中にも、『スダチの苗木』にも、私は強烈な感動を受けてきました。それは先生の内なる叫びに触れた感動であったし、先生の生き方と巡り合えた感動だったと思うんです。森口健司という人間を知ったからこそ、その感動はより大きなものになっていったと思います。

先生はすばらしいものを持っているのだから、関心のない人の心を揺さぶっていくためにも、主義主張を表に出さず、登場人物の深い内面、その心の揺れを描いていくことが大切です。主義主張が多くなると、関心のない人はああそうかで終わってしまう。

もっともっと内面を描くことを通して読み手の心を揺さぶっていくことを考えてみませんか。そして、部落問題に無関心であった人に、これは私のことだ。私自身の問題などと気づかせていく。そんな作品に仕上げていきませんか。私は『峠』という作品に期待しています。」

文部省での1回1回の会議、その中で学んだことはとてもなく大きい。特に3学期に実施された会議は、進路の仕事と重なり、多忙な中での会議への出席となった。帰りの飛行機の中で、そのときそのときの思いを記し続けたことが、私自身に生きる指針と大きな「よろこび」を与えてくれた。会議で多くの先生方からいただいた言葉は常に新鮮であった。その思いを飛行機の中で噛みしめる場面の連続であった。2月2日の会議の帰り、つぎのような記録が手帳の中に記されている。

【ひたむきな頑張りが問われ続けている。多くの人の意見に素直に耳を傾け、その考え方を自らのものにしていく姿勢。人間には誠実さがいる。そして、多くの人の思いに応えようとするひたむきさが常に必要とされる。共に苦しんでくれる人がいる。共に頑張ろうしてくれる人がいる。自分に何ができるかを問い合わせながら、全力で一日一日を生きていこう。多くの人の願い、多くの人の魂がこもった作品にしていこう。】

大半の先生方にとって同和教育は極めて遠いところにある。その現実を踏まえて、精一杯の思いを返してくれる先生方の存在がありがたい。先生方の真摯な意見に応えるためにも、もっともっと頑張らなければ…。感謝の心を生きる支えとして頑張っていこう。様々な工夫をこらして、よりよい生き方を求めて…。】

それ以後の会議で繰り返し、『峠』についての検討がなされていく。本当にこの作品が取り上げら

れることがあるのだろうかという不安を抱えつつも、心の中にはすっきりとしたものがあった。多くの先生方の支えが本当にありがたかった。

特に大野先生からいただいた手紙は、私に生きる指針を示してくれた手紙として今も心の中に響き続けている。それは『峠』について綴られた手紙であった。

【今夜あなたがやりきれない憤りを抑えて、雨の中を帰っていかれる姿をずっと考え続けておりました。実は私自身への苛立ちとも重ね合わせて考えていたのです。マスコミの仕事に関わりを持っていると、否定することなく社会的な不公平と顔をつきあわさなくてはならないことがあります。行政に問題を持ち込んでいくと大抵は前向きに考えてみましょうと、一応は好意的なお答えが返ってくるだけで、結局はうやむやに葬りさられてしまいます。それならまだましな方で、冷淡に門前払いをくわされることの方が多いのです。新聞記者の頃、友だちだった何人かは、組織に問題を持ち込むことで間接的に目的を達しようとした。徒党を組めば問題の解決へ一步前進したような錯覚に捉われるものです。

森口さんが、これから対生徒や学校の世界から一步外へ踏み出した時に立ちはだかってくる壁は、私が想像するよりも遥かに巨大なものになってくると思います。自分の力だけで、生徒や周囲の励ましただけでそれを乗り越えていけるかどうか、あなた自身の選択を迫られる時があると思います。

私の友人たちの取ったような道を選ぶのか、それはあなた自身がお決めになる問題であり、私自身の口出しすべきことではありませんが、あなたがあまりにも純粋なだけに、その挫折を怖れるのです。どうか勇気を持って立ち向かっていってください。祈ります。あなた自身の信念を貫いていかれることを望みます。

『峠』が文集に掲載されることをどれだけ願っているか分かりません。ただ横山先生の立場も微妙で、彼にとっても難しい選択を迫られる問題だと思っています。周りへの思惑やお役所流の自己規制で、せっかくの作品が目の目を見ないことのないように願って止みません。反面、すべての人々に文句なしの感動を与えるような作品を創作していくことは、今度は森口さんに課せられた使命です。『峠』が上の人たちの意に沿わないのなら、それを越える作品を書けばいいのです。創造することに限度はなく、その能力をあなたは与えられているのです。

今夜、家に帰って考えをまとめるもなくこの手紙を書きました。あなたが今もし、『峠』のことで苦しんでおられるのなら激励したかった。それだけの思いで書きました。便箋が途中で切れてしましました。書き直していると別の文面になってしまいそうなので、このまま投函します。

## 追伸

実践記録『よろこび』本当に感動して読みました。生徒の反応がどれも生き生きとしていて、こんな手応えの得られる教師であることのすばらしさを羨ましく思えるほどです。】

『峠』は本当にたくさんの人たちの支えられて日の眼を見た。この結婚差別の現実をあらわした『峠』という作品は、同和教育を通してつながったかけがえのない仲間の叫びを結集させたものであり、場面の1つ1つが紛れもない事実である。

この作品の冒頭に記した結婚式の招待状。

『 生きるということ

愛するということ

相手のいのちを尊ぶこと

私たち二人は

現在も そして永遠に

すべての人間を尊敬し

すべての人間を信頼し

真実を正視し

美しさを求めて

生きていこうと誓いました

私たち 結婚します 』

この招待状は、私が教職についた1年目に出会った、部落出身の女子生徒から贈られたものを引用した。彼女は小学校の教師となり、結婚の約束をしていた同じ職場の教師と、私のクラス3年B組（1991年度卒業生）の公開授業を6月（板野郡同和教育研究大会公開授業）10月（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）11月（徳島県中学校同和教育研究大会公開授業）と参観にきた。そしてその生徒たちが卒業していった3月に2人は結婚した。

結婚までの道のり、彼女は部落差別の厳しさを痛切に感じ、その中で投げやりになりそうな自分、負けそうな自分を相手の青年と共に励まし支え合いながら頑張り続けてきた。そして、この2人の姿は3年B組（1991年度）の生徒たちに対して、部落解放への主体的な生き方を示していくことになる。

猛烈に反対する母親を必死に説く青年の頑張り。その中で一番最初にこの結婚を認めてくれたのは、青年のおばあちゃんだった。一番わからないと思っていたおばあちゃんが、差別することは自分自身を苦しめ、自分の大切な孫を不幸にしていくことに気づき、一番に心を許して、

「いつまでも世間にこだわってどうする。息子のほんまの幸せを考えてやれ。」

と父親や母親を説いていった。差別という檻から解放されたとき、人間は本当に幸せになれるという確信を持ち、2人はまわりの人たちを部落差別から解放し、堂々と結婚していく。その2人がつくりた結婚式の招待状、それは2人が中学時代にそれぞれの中学校で学習した「水平社宣言」が土台となっている。

この招待状は、私にとっても3年B組（1991年度）の生徒たちにとっても大切な宝物である。しかし、この2人のように厳しく険しい峠を越え、本当の幸福をつかんでいる仲間はまだまだわずかである。厳しい部落差別に喘ぎ苦しんでいる仲間の叫び声が、今もはっきりと聞こえてくる。私は1993年度の卒業生（3年A組）との最後の部落問題学習の資料にこの作品『峠』を選んだ。その授業記録は、いつまでも私と授業に取り組んだ生徒たちを励まし続ける。

この授業で、ある生徒は、自分自身が世間体の中で苦しみ差別している現実を次のように語っている。

「差別意識の蔓延している世間におびえて、世間を気にして生きていくということは、本当にしないものだと思います。私は高校を選ぶ時も世間体を気にしました。私にしても私の両親にしても、世間体を気にしていく底には差別があると思います。

差別がなくなるということは、私たちが自由に安心して生きられる社会にしていくことにつながると思います。私は私を世間にこだわって縛っていくことがないように差別をなくしていきたいと思います。」

また、この授業から学び取った思いをある生徒は、次のように綴っている。

【『峠』という資料を読んで、私は本当にこんなことがあるんだなあと思った。今まで、そんなことを絶対ないと思っていた。でも、私のおばあちゃんとともに、近所の人の仲人をしているときに、「家はどのくらいの大きさ。お父さんとお母さんはどこにお勤め。お母さんのお里はどちら…」といろいろ電話で問い合わせをしています。私はどうしてだろうと思っていたけど、家柄の同じような人となら苦労せずにすむとずっと思っていました。

でも、それは本当に間違っていると思うようになりました。家がお金持ちだからとか、お父さんが〇〇会社に働きに行っているからとか、そんなの本人には関係ないと思います。でも関係はないけど、やっぱり世間が思ってしまいます。世間というのは人じやない、自分だとわかっていても、近所の人にどう思われるかがすごく気になってしまします。

話は変わって、高校のことだけど、私は小さいときから、「Aさんの男の子、〇〇高校いったんやつて…」とか、「Bさんは、〇〇高校やって。頭わるいんやな。〇〇や、最低や」って、周りの人人が言うのを聞いていました。「Cさん、〇〇高校いったんよ。いい子やなあ。人間ができる」とか。そんなことを言っているのを聞いて、私は絶対いい高校に行って周りの人にいいように思われたいと思っていました。本当に本当にすごく嫌なことなんだけど、前に友だちとかが、「〇〇先輩って、全体学習の時とか、すごいいいこと言よったのに、〇〇高校や行つとる。何かがっかりって思わん」って言ったので、「うん、私もそう思う」と答えてしまいました。それで冗談みたいに「全体学習にあんまり必死に取り組みすぎて、勉強する暇なかったんちがう」とか話しました。やっぱり肩書きによって、その人はいい人にもなるしつまらない人にもなると思う。

そんなの絶対おかしいけど、やっぱり世間がこわいという気持ちが大きい。高校も結婚も世間ということを気にしてしまうことは似ていると思う。私は自分で決めたい。私の両親はきっとわかってくれると思う。人間の本当の誇りとは何だろうか。自分に誇りをもって堂々と生きられる人間でありたい。】

そして、ある生徒は、この授業の後半、1学期の授業で涙を流した自分をみつめなおし、自らの差別意識を語っていくのである。

「私は1学期の部落問題学習の時間、識字のことを話し合ったとき、私は私のおばあちゃんが字を書けないことから、おばあちゃんが部落の人だと思い込んで泣いてしまいました。みんなの前であれだけ泣いてしまったのは、私の中に部落の人を差別する意識があったからでした。私の中にある差別意識が私を苦しめていました。

部落問題は部落の人だけでなく、多くの人を苦しめている現実がいっぱいあると思います。私は

私の差別意識をなくしていいって、あんな情けない涙を流さなくとも生きていける人間になっていきたいと思います。この学習は、本当の人間になっていく学習だと思います。」

そして何より、作品『峠』の最後に記されている父親の「部落の人たちは、重い荷物を背負っている人たちだと思っていた。しかし、その荷物の中に私が入っていたことにやっと気づいた。私も共にその荷物をかついで生きていく」という言葉は、多くの生徒たちに解放の主体者として生きていく生き方を明確に示していくたとを考える。

自分自身の差別意識が部落の仲間を苦しめている現実に目覚めたとき、私たちの身体には大きな衝撃が走る。私たちは自らの差別意識が被差別の人たちの荷物の中身になっていることを自覚し、その荷物の中から抜け出してその荷物を担いでいく生き方を貫きたい。そして、それは私たちが人間として生きることの意味であり、本当の「よろこび」をつかんでいくことになると思う。

この『峠』や『スダチの苗木』は、多くの先生方の努力によって、『文部省道徳教育読み物資料とその利用』に掲載され、全国の中学校に文部省より配布された。また、いくつかの出版社が発行している道徳の読本の中にも掲載され、道徳学習の資料として、また、人権劇等の取り組みにも活用されている。

最後に、『文部省道徳教育読み物資料とその利用』が全国の中学校に届けられるちょうど1年前、社会科の教員の研修会でいっしょになった京都で中学校の教員をしている大学の先輩からの手紙を掲載してまとめにしたい。

【拝啓 師走も半ばを過ぎようやく真冬の寒冷が身にしみると共に、学期末も迎えて大変慌ただしい季節となってまいりました今日この頃、先生にはますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、今日は居ても立ってもいられない気持ちでお便りをさしあげた次第です。

今日、朝から回覧文書の閲覧中、文部省発行の道徳教育推進指導資料（指導の手引き4）を手にとって何気なく開けたページから目に飛び込んだのは「スダチ」のイラストと「森口健司」という先生のお名前でした。夢中になって読んだ先生の『スダチの苗木』の文章は、まさしく昨年の夏、低気圧の接近で苦心惨憺して到着した社会科教員の研修会（北方領土教育指導者研修会）の会場である根室グランドホテルでお会いし、その際の懇親会場で先生から真摯に語っていただいた先生の生い立ちや同和教育にかける熱意そのものであり、何という因縁かと感激した次第であります。

今日、先生の一文を読ませていただき、昨年の夏の鮮烈な記憶を呼び覚ましながらお便りをさせていただきました。先生の言葉に教えられつつ、人間としての正しい生き方を今後とも模索し、同志社の良心の碑である『良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来タラン事ヲ』念じつつ日々の仕事や生活に精進していきたいと存じます。

先生も同志社大学の柔道部で鍛えられた頑健な身体と真心でますますご活躍のことと存じますが、ご家族共々御自愛され御精進されますよう御祈念申し上げます。】

人と人とのつながり、本当にありがたいものである。多くの人の生命に生かされていることを実感する。この『峠』や『スダチの苗木』の学習が、様々な地域で確かな方向性を持って実践され、すべての中学生の生命輝く道徳学習が根づいていくことをを目指して歩き続けたいと思う。